

## プロティノスの一者と西田の絶対無

岡野利津子（学習院大学）

プロティノスは西田が深い共感を示した哲学者の中の一人だと言ってよいだろう。「一者について」と題する未完の原稿の中で、西田は「形あるものは形なきものの限定である」とプロティノスを解説している。プロティノスにおいては、「形相」のないもの（一者）の形が限定して見られるところに叡智界の形相が生じ、更に、感覚的な形をもたない形相（「無形の形相」）が限定して見られるところに感覚的な形が生じると言える。しかし、「形なきものの形を見る」というのは、西田が東洋文化の本質として語っている言葉でもある。

プロティノスの一者と西田の絶対無における基本的な共通点は、両者とも主観と客観との区別以前の無限定なものであり、その限定として諸々の現象がみられるところのものだということであろう。その一方で、西田とプロティノスとの相違として最も注目されるのは、他ならぬ西田自身が指摘している点であろう。西田によれば、「西洋文化の源となったギリシヤ文化は有の思想を基としたもの」である。確かにプラトン－ピュタゴラス主義的思考に代表される考え方によれば、存在、即ち限定された形のあるものが善や完全性を意味するのに対し、非存在、即ち限定されておらず形をもたないものは悪や不完全性を意味する。しかし、プロティノスの一者が存在（形相）でないのは、存在（形相）の欠如としてではなく、それを生み出す始原としてである。西田はプロティノス哲学を「プラトン哲学を極限にまで押し進めたもの」とみなす視点から、プロティノスの一者をノエマ（形相、アイデア）の方向にノエマ（形相、アイデア）を超えたものだと考えている。しかし一方で、プロティノスの一者はアリストテレスの言う「ノエシスのノエシス」を超えるものという意義も有している。そして、西田の死後、プロティノス研究者たちの中で盛んになった叡智界における主観・客観（叡知的質料・形相）と一者との関係についての研究からは、プロティノスの一者はノエマ（形相）よりもむしろノエシス（叡知的質料）の方向にノエシス（叡知的質料）を超えたものだとみなされることになる。つまり、プロティノスは、形相を探究することにおいて一者を見出したのではなく、見られる形相は感性界のものであれ、叡智界のものであれ、全て捨て去り、見るという作用が原初的に起こる、その根源に遡ったところに一者を見出しているのである。

プロティノスの一者は西田自身が考えていた以上に西田の絶対無に通底するところのあるものだと思われる。プロティノスの発出論には、西田の「自覚」や、自己の内に自己を映すという「場所」と似た構造がある。一者から発する無限定な「視力」が一者を振り返って見ることが諸形相（諸存在）の生成であり、直知活動の成立であり、ヌース（叡智）の限定である。「発出」即「振り返り」である。この時、形相をもたない一者から形相が生じ、存在でない一者から存在が生じることになる。そして、プロティノスの場合、一者から発して一者に帰るところにヌースの自己直知の本質があることになる。この働きは端的

に、「一者が自己自身へと振り返って見る」とも言われる。西田も、プロティノスの一者について、「自己が自己を知る、即ち自覚と云ふものを考へる時、かかる無から有が出て来るところがあると思ふ」と述べている。実際、プロティノスにおける一者とヌースとの関係は、西田の「自覚」における「直観」と「反省」の関係に類似している。一者そのものは「実体のない第一の活動」とも表現され、それは自己を対象化することのない、前認識的な「自己直観」だと述べられている。そこから自己を対象化して見る働きが発したものがヌースの「自己直知」である。ヌースと魂との関係も同様で、プロティノスの発出論において重要な役割を果たしているのは、「振り返って見る」という働きである。一者やヌースや魂が振り返って見られたものは、一者やヌースや魂の展開であるが、こうして展開されたものは始原である一者の内容を超越するものではない。そもそも一者は無限のもので、その意味では一者の外は存在しない。一者からの発出は、「一者が自己自身へと振り返って見る」、即ち自己自身の内に向かうことによって行われ、一者は「すべてを包んでいる」とされる。プロティノスの一者は西田の絶対無のような、「有に対する無ではなく、有を包んだ無」である。

こうした類縁性が見られる一方、プロティノスの一者と西田の絶対無との間に存する大きな違いは、西田の絶対無が日常を離れたものでなく、日常の底に見出されるものであるのに対し、プロティノスの一者は日常を超えたものとして述べられている点である。西田の絶対無もプロティノスの一者も、我々の側の自己否定を通じて触れることのできるものだという点では同様だと言える。しかし、西田の場合、我々の自己は「絶対現在の瞬間的自己限定」として、いつも絶対無に対していとされるが、プロティノスの場合、一者との合一は、我々が敢えてすべてを捨て去った時に「突如」生じる非日常的、例外的な体験で、それは瞬間的ではなく、ある時間的幅をもった出来事である。プロティノスの一者はすべてを産出しながらも、それによって減少したり動かされたりすることのないものとして強調されており、その点では静的なものである。そこに我々の自己が一致し、そこから「外れない」間が一者との「合一」である。但し、一者には「発出」という側面があり、一者との「合一」は、次にその力動性に与ることでもある。プロティノスの場合も、西田の場合も、我々の自己は一者や絶対無を廻って「円環的な」あり方をしているが、西田ではこの「円環」が一瞬一瞬の内に見られるのに対し、プロティノスではそうではない。

概して、プロティノスに見られなかった一方で西田に顕著であったのは、個人性や身体性、日常性を重視するという点である。プロティノスでは「個」というものについて考えられておらず、個物と個物との関係というものも出てこない。そこで、我々の自己と一者とのいわば相即的な関係は認められることはあっても、西田哲学におけるように、個物と個物の相互限定という面が、絶対無との相即関係で論じられるということはない。プロティノスの一者が我々の身体を離れたものであるのに対し、西田の絶対無は、身体を持つ我々の現在の自己の根底であると見ることができよう。